



久續五百

5
693
1



一具庵大人撰

俳諧故人續五百題

江戸書林

萬笈堂
桂林堂

人心不同、猶如其面、作俳
句者亦復、自甫狹我所好、
以譏彼、彼亦狹其所好、以
笑我、至仇讐相視者、非惑
之甚、守予晚年慕蕙翁、遊
于松窓之間、雖未能入其

室、螢雪工夫殆費十數年、
暇日涉獵諸抄摺據以為
一冊子、聊以付尚友之義、
近日書肆某乞梓以行世、
予謂此集一時隨聞見而
錄之、初無示人之意、取捨
或未盡其公也、雖然寒鄉
僻地、晚生乏資者置之於
八上則江山風月自在其
中、亦不為無聊矣、松窓嘗
曰古人所好、一異其鱗
裁、苟能蒐羅則可為大家

也然則此冊雖小、安知非
其楷樣哉

中文政己丑春正月

一具庵一具

九世十方堂二書

大木蓋其心也



玉百様のしらぬだらうあるさあんと
まよふくもいして大慶高橋の
方寸うたゝるものすなり 短
句もてあまふもまゝなり
けりいふもかゝりけしと昇平鼓腹
の御代めいしこまちなり
中にも帳臺の花の夕漁村に雪

此あぢはなれ義殿へもさらし毎に
たもさしししあ人ならんあうけ
さういれしと風雅の二字は眼とあて
うろれ月あまさらうまこらあいて
むとおもいらまあうまはしし
一具菴主いりうらめらあぬるあ
とろりあもあはあまこらあまこら

をやしよさつて園了實拾て句

高葉子しめおまきあぬいあま

此家事子らうらもともちうらあ

まああふうちよとえく桜木子と

ささあさるんあはあはああさ

ああああああああああああ

あしと餘濤めらあまらあし

利門 698 卷

画棟虹梁をうららけり入るるよはな
 き准十繩はらへんも
 文政己丑もつまつまき
 さらさら日

大雲栗菴



古人續五百題發句集

春之部 目錄

明治三十二年丁巳一月五日

坪内祐成氏寄贈

花 おとろ	二 七の橋	三 八の橋	元日 四 七の日	初かきみ 五 新玉	五 五
著衣初 五 七の夜	五 こよみ	五 まくら	六 七の夜	六 福寿草	六 五
七 六の春	六 流代の春	六 福寿草	七 七の夜	七 ゆき	七 七
七 七の夜	七 うき	七 ゆき	七 七の夜	七 ゆき	七 七
七 七の夜	七 書初	七 屠蘇	七 七の夜	七 屠蘇	八 八
八 七の夜	八 万歳	八 蓬菜	八 七の夜	八 蓬菜	八 八

かみ餅	八	若水	八	年玉	九	中りごと	九
水いりご	九						

植物之部

子の目	九	小松引	九	七種	九	なごり	十
まはれ	十	若菜	十	芥	十	梅	十
折	十一	ととろ	十一	下崩	十一	若草	十一
核	十二	おぼろ	十二	木のめ	十二	つる緑	十二
藻の橋	十三	莖とら	十三	らぎぎ	十三	すみれ	十三
ふんち	十四	はとじ	十四	めぎみ	十四	木瓜	十四
芦角	十五	接木	十五	ろど	十五	茶ほみ	十五
菜の冬	十六	種おや	十六	桃	十六	海棠	十六
連翅	十七	梨の花	十七	杏	十七	あや	十七
	十八						

木蓮花	十九	草いぎ	十九	苗代	十九	つるご	二十
菱	二十	山吹	二十	ほじ	二十		

生類の部

鶯	二十一	福どの虫	二十一	白魚	二十一	まの巢	二十一
雀子	二十二	百子鳥	二十二	雉子	二十二	むすこ	二十二
帰雁	二十三	乙多	二十三	駒鳥	二十三	うぎ	二十三
麦藁	二十四	蝶	二十四	蟲	二十四	蜂	二十四
蜆	二十五	蛙	二十五	田螺	二十五	蟹	二十五
若鮎	二十六	飯鮎	二十六	落角	二十六		
時	二十七	時候之部	二十七				
佐保姫	二十八	ひんぎ	二十八	ききり	二十八	泳生	二十八
左義長	二十九	霞	二十九	おろろ	二十九	凡中	二十九

入	三十一	餘寒	三十一	河如る	三十一	燒野	三十一
雪間	三十二	残雪	三十二	東風	三十二	春の風	三十二
雪解	三十三	春の海	三十三	春の月	三十三	春の日	三十三
春の夜	三十四	春の海	三十四	水ぬるむ	三十四	海雲	三十四
春の野	三十五	寒の良	三十五	草餅	三十五	陽冷	三十五
海苔	三十六	二日交	三十六	初午	三十六	彼等	三十六
系し	三十七	混衆	三十七	西行忌	三十七	永き日	三十七
侍忌	三十八	雛	三十八	鶏台	三十八	汐下	三十八
出代	三十九	曲水	三十九	如らち	三十九	長閑	三十九
馬刀	四十	峯入	四十	行春	四十		
いろれ霜	四十一						

通計百五十二題

古人續五百題 夏之部 夏之部 夏之部 夏之部

ほとぎ	初	用古	三	老翁	三	雀	三
より雀	二	翡翠	三	羽如ける	三	鴉	四
水鶏	四	あし	四	水鳥の巢	四	あし	五
かき	五	羽蟻	五	あまのり	六	夏の虫	六
がら	六	蚤	六	蠅	六	夏の虫	六
蚊	七	蚊	七	蚊	七	蝸牛	七
蟬	八	空蟬	八	麻の子	八		

時候之部

更夜	八	ありせ	九	青簾	九	葵の糸	十
ほつと	十	卯月	十	皋月日	十	あまの月	十
夏糸	十一	夏書	十一	灌佛	十一	花沙堂	十一
新茶	十二	糸糸襪	十二	風呂	十二	みどり夜	十二
麦秋	十三	小角豆	十三	かみを	十三	鯨	十三
蛸	十三	のぼり	十三	粽	十三	昌浦湯	十四
卯地うち	十四	競馬	十四	竹酔日	十四	五月雨	十五
入梅	十五	虎々雨	十五	みづ雨	十六	夏の日	十六
夏の月	十六	夏野	十六	夏山	十六	火串	十六
築らち	十七	田植	十七	早乙女	十七	早苗	十七
青田	十八	田草糸	十八	あまぎ	十八	ららハ	十八
帝帳	十九	帷子	十九	祇園会	十九	氷室	十九

雲の嶺	十九	夏乞	十九	昼森	二十	土用	二十
虫がし	二十	あまぎ	二十	夕立	二十一	簞	二十一
作ぬ人	二十一	まごみ	二十一	風うら	二十二	うち水	二十三
とまろえ	二十四	まの葉瓜	二十四	沖鱈	二十四	清み	二十四
まじり井	二十五	行ぬみ	二十五	夏瘦	二十五	川狩	二十五
秋近し	二十五	不二詣	二十五	歩後	二十六		
極りの部							
郊の糸	廿六	糸糸糸	廿六	若楓	廿七	糸糸襪	廿七
実ほろえ	廿七	まごみ	廿七	夏木立	廿七	下闇	廿八
青嵐	廿八	まの葉瓜	廿八	桐の糸	廿八	まの葉	廿八
夏柳	廿八	まごみ	廿九	標	廿九	栗の糸	廿九
合歡の糸	廿九	まごみ	廿九	まごみ	廿九	標のまご	三十

百日紅	燕子花	ほきん	芍薬
三十一	三十一	三十一	三十一
葵	苔のそね	けし	荊
三十一	三十一	三十一	三十一
牛の子	ゆき	茄子	あき
三十一	三十一	三十一	三十一
紅ゆき	夏菜	摺子	百合
三十一	三十一	三十一	三十一
たぢみ	さうほ	藻の花	檨麻
三十一	三十一	三十一	三十一
紫陽花	萱草	あやめ	夕ぐほ
三十一	三十一	三十一	三十一
萍	河骨	蓴菜	蓮
三十一	三十一	三十一	三十一
蓮葉	あじろ	蘭の心	美流刈
三十一	三十一	三十一	三十一
若竹	林檎		
三十一	三十一		

都の百五十二題



古今續五百題發句集

春之部

花

あたらしく生ひたてよ花の両
 うれしくとこを花の芳きま
 花をまふこの山風やこしはくみ
 武彦路もはより出てまき花の酒
 目らつりや花よむせらるるま
 花はつり山を日と海の初ほけ
 ちねとめあめとみとる童うね
 花さうりらみやこの酒をいれ

負徳
 負室
 季吟
 宗因
 鬼貫
 芭蕉
 立圃
 守武

花さうりの子てあうらあまぬる子
を好くよも毛虫よなうらうら家様
ある人母あはしくと花えんか紫
ううくとまてん花えんの苗さる共
花さいのを死ともさいの病ひう郡
を好く一花ぬるや葛城うらまら
津安らや西行房りま好くうせ
首出して固のをえんあらひとを
をふまてあそぶ日あうてと郡えんう南
花ゆるめりて夢よりあふ死んうま
大佛うらうら花のけうりこの紫
持の装束あはうり直とや花の中

其角 嵐雪 去来 大草 末山 正式 言水 荷今 野坡 越人 路通 北枝

昆布出くや花の氣のほくうらあま
酒初や小琴の音せよ窓の花
大掌やうら母の奥れ花のを
山やま好酒根くの酒をや
めつじや内う都見の初やう
朝えんの湯をけ騰や庭の花
さりのあひや初花うりの物うとれ
兄すのうらけあけうり花の時
教るうらうら酒ぬと人よく
疱瘡のあたまうらうらうらうら
葉喰うら白ひをさうらうら花ゆる
常秋ふらうらうらうら花の鳥

利牛 惟然 曾良 亀洞 杉風 孤屋 野水 荒彈 舟泉 傘下 今幾 午那

あけけりや風車賣る茶のとき
さるの山ささくも年入てあふまへん

薄芝
晨風

櫻

鶴の巢小嵐の外はさくらさくら
あまあまもみ様さししとつうひひ
様ねむそろうつことあるひとろ
を鞍うひこれやうる縁ん山はくら
かけみく降おきれけし様か
麓寺かくまぬりのいさささの菊
殺々特の妻様るる様茶を

芭蕉
其角
秋風
如泉
支考
李風
嵐雪

足あをとをさららりまうる菴二
一枝ハをさるもころー山はくら
あつつきい奥やさるせや様こ
雞の声もまきゆるやまきえら
屋形あ称よ時の様ちりせけ
考の端は宿まきく入るや山様
食の航えれあつまるやや戸作ら
様えくねありくるを食る
そんまうと有羽のこは様う那
葛菟の名物とらん山をくら
筆ふこそ墨染様かとはくら
池うりもせん葉てんよ様さる

杜園
尚白
利牛
凡兆
杉風
丈草
野坡
梅舌
荷兮
李里
徳元
重頼

初様

糸糸せし芳野もすく小江戸様
 沙汰座のそこめりるり侍努様
 温石のめりぬ夜まやちりはくら
 七夕小契おきてしと門をくら
 小僧まきり上野谷中の初様
 教ふ似ねけりるもあし初さら
 ちの様天物のうらと命にせん
 供ふれもどりふこそよ是ちの様
 人の氣もかく窺へし初さら
 赤座や木ふりと虫居とちの様
 頬白の終ふるかきよ初九之良

素堂 宗因
 露沾 鬼貫
 素堂 芭蕉
 去来 吉保
 沾徳 沾荷
 闇指

八重 様

奈良七重七堂伽藍八重様
 花垣や雲も和光の八重さら
 宗てまはけりへはきん八重様
 ハを様東も移る奈良榮ふれ
 又ひても是七重の繕を八重様
 万日の人ねちりともや進きくら
 さく糸やとりの下まなほ進様
 誰母そむに縁教ふるあそさえ良
 紙屑やとろくふ小あそ侍くら
 はうぬまをまらやとひうせの進様

芭蕉 鬼貫
 吉保 沾圃
 幸和 其角
 鬼貫 祐甫
 柴帯 常久

遅 櫻

元日

元日やおりのまゝひー秋のくれ
 元日や月まね人のほーの音
 元日や漸くくくくくくくく
 元日や土法桐くくくくくくく
 元日も旅人をえる驛う南
 元日を明きぬーたる霞の船
 元日の木は間の競馬只ゆるし
 元日や夜ふりき夜のうら表
 元日やまゝと斥るうは梅のう好
 梅う香の筋ふまよる初日くれ
 亀の脊ふ海老ほのめし初日山

芭蕉
 其角
 虎雪
 去来
 佑徳
 一笑
 重五
 千川
 猿雖
 支考
 鬼貫

初日

初雲

新玉

着衣
始

濡りうや大ううけの初日け
 朝紅や水うくくく初めのみ
 枇杷の葉おむたううう初霞
 何と玉の馬もあまの所ういみ
 鳥の愛西あま玉の年とらう
 あまのままりあまのまりう春日
 愛あありてはくしの綿やきを始
 母この紋うくくくくくくく
 終うううううううの袖まをけく

任行
 鬼貫
 斜嶺
 嵐雪
 鬼貫
 貞室
 宗因
 山峯
 しく

初夢

こよみ

まゑ

はりのまや額ふあはは崩子よと
ゆえ明て浪のりうはや泊瀬寺
秘ゆめや濱名の塔は今のま
しら夢又のよきま古やとケ日
下りゆ右ふみし生のこころみうね
伊勢磨みちれおくまてるふれり

其角 嵐雪 越人 隈光 徳元 幽山

いろくろや新年ふくるる五弁
春まや星の中うら松の色
年とまるとらん天の戸やめしあはせ

芭蕉 鬼貫 正式

今初
の春

心
のま

傘のたるとかみのも胡のいろ
我多式う宿あゆるやけさはま
今初の春更孫も有考も有損を返
刀さぬ供もつとらしりさのいろ
伊勢浦やお木引体む今初のま
けさのま海ははとありまのりら
袖さうて松の葉舞るくおはとる
うけの春寂しからさる閑の那
佛より神そたろとまけさの春

二日あもぬくりのせしなまのま
稀なる年や日もらとんけのむの春

守成 眞室 嵐雪 正秀 雷洞 西桐 梅言 冬松 とろ

芭蕉 李吟

後代
の事

福寿科

おりろやひの初折のむね
まろ糸のまいととてむの
ふれ人のまかじむれま
五十少て四谷をこころ
窳形てい達しあてむ
背さらおふりのをせと

宗因
惟然
古梵
嵐雪
去来
野童

昌陸の松とらけ手ぬ
治とる氣やアんとと
福寿科一すりのは

利重
正式

福寿科一すりのは
く壽草やハ明この梅

言水
富丸

後慶

門松

うい
糸

新島の湖まはらけ
長松の親の名て

宗因
野波

門松やうい糸
うい糸の松を
門まもかきゆる
まう門や二
門ハ松若葉園の

鬼貫
宗因
正式
徳元
舟泉

山柴ふらう白
うら白もをこち
神の馬を

重五
胡及

標

ゆけりやあやみ家のよかきり
標の世阿弥まうりや青かきり

立圃
嵐生

大福

大福くや淡路もみさん茶白山
大ふくやけふとそむ江戸茶武

鬼貫
止安

菫固

むかえやとん云さして水の恩
菫固や鹿野の神はめくんと

言水
直良

書物

書物や行年七十按明の位
ゆとりとやたふゆくとてきまじゆ
虫とめもまらや鹿のまをかく

宗因
其角
貞庵

屠菫

とこの酒ハゆと玉雲の小亀うた
屠菫はや武義神も君う万喜盃

幸吟
正隆

雑菜

さあふ煮や五代の敷くおかめを
庭竈牛もさあふをとわりのきり

とて
其角

大著

ち考や和泉の松木まのまは
ゆととやを鞍の役村持とて

唯笑
秋坊

萬

まんさのやの富士の山まのけのま
流れてきてふあまらせり万喜樂
万喜のやとを隣お明くま

青雲
一井
荷兮

字云

蓮菜

蓮菜の根やふくや芳根の香
蓮菜よかけくのかさるや若れ袖
蓮菜や山城密柑やみからし

其角
太来
維舟
端水

鏡餅

古きも曰ふとせとまの鏡餅
いくつやうね一汁料の鏡餅

宗因
貞室

若水

若水や凡ふ年の清く通るを
若水やふふくくき清氷
つらさをうらうけてるよ雪の掛
あふみ舞のまは涼さよ

風鈴
武仙
龜洞
牛角

年玉

年玉とそれくまてもえ方
空しくもく古風をめく扇うを

可夢
徳窓

遣羽子

羽子板の繪松葉巻ややとの春
うね伝く羽子といひる子供うね
をこ板の篇よりまは雪

季政
満水
吾仲

氷鏡

氷死れしうー男とと氷らひ
をんがの森やうさ絆氷鏡ひ

其角
丁我

子れ日

松脂はたす膏薬の子れ日う有
腰をれし子の日れ歌やしきり香
をたれて跡もけとへる子の日れ

貞徳
季吟
貞室

小松引

押ひくやめ糸このりる 姫小松
加賀ふ小松引や越中お次ふき
引つとて松をくちゆは荒うな

宗因
幽山
其角

七種

七種をええんうらさ手首う那
七くさや跡まうめう朝かふと
七種をたききたうりて泣子哉
七るあや粧ひあけく切きうみ
七くさく枯葉あかあめ草穂哉
七種はくやーとめてや七ひやうー

嵐雪
其角
俊似
野坡
沾徳
貞室

薺

まの草

四方より川薺もきうらうりて海うね
六日八日中七日のな川さう初
うかれまて薺うやせや神楽町
一年のま拍子まな川なうれ
風流うて石まさう目る薺う糸
薺うね薺ううらなをさうあ胡蝶
草枕な川さう川人付とわん
まのね板お穿うー薺の青あうく

芭蕉
鬼貫
舟竹
無論
嵐雪
其角
山川
此筋
鬼貫
來山

若菜 齋

隣はうらうらめひさる若菜我
す夏の野ふはくくろてわろろ菜摘
きくくくと雪付てこよろろ好春り
梅若菜よりこの宿のとろけ汁
ろろ菜摘めとろ木を割畠ろな
うかれ雀妻よと里の船りう菜
一かふの牡丹ハ寒きま若菜う好
ろろ市やまふ漕くはいろろ角
霜を若菜雪に樂もろろ菜我
猪出して摘ともこえぬ若菜の都
吾ろろも残してわろろ菜ろれ
海もろろ若菜をわろろ若菜の角

貞室 鬼貫 未山 芭蕉 越人 其角 尾頭 嵐蘭 嵐雪 野水 素秋 素衣

芥

女出く語く川跡のころなこの都

我らあ鶴とこのときせりの食
はふ野芥梳はなろろ素
摘よりもえろろひまろろ根芥我
芥摘とてこけて酒かたえとろれ
初熟やあ田の小芥ろろ氷
芥はしや伊歩行一とまこめてけ
名也けり芥の白根のかみあふ
地の底は雪川出と根芥の南

小春

芭蕉 其角 亀翁 且菜 定耕 野徑 幽山 貞室

梅

手鼻うむ音上人梅のさうりる奈
高嶽や海よりくれてうそのお
にを根の梅ひらきちり烟出
梅う香や乞食の家ものそう角
梅下しやとちりてわう梅のとな
さうりねく梅あそくまる月歌
病後の庭よく梅のさかえうな
梅の香りの気ふいけけしき哉
かりつぎぬ遊ふよ梅の教くち
瘦義や作りもあれの軒は毒
ささくふ咲そらつ縁と梅の花
日あさりの梅さくくろや骨牛肩

芭蕉
去来
丈草
其角
嵐雪
野水
曾良
越人
惟然
千那
野坡
支幽

梅

花白ふ梅とを双のこととるう奈
あつてさよまんの香もさし梅の花
北面のえけひらんまとのむ免
早とより空をらんあめと梅のそな
梅一本ははとく草のさうこうね
梅をみる公をおのれ花もおのそ
白雲をそらるまきりくる梅の花
空る居く折れをそとわし毒れ花
あさくしれ羽卒を慮まこさる梅の花
梅さきく湯屋の宿さるわしけ
毒さくや白の扱木のよきまこのり
梅のをねるふよひよくて白ひこの角

宗祇
貞室
季吟
宗因
露沾
鬼貫
竹亭
鷗歩
万乎
利牛
曲翠
來山

柳

ちれりのお柳のさうらるちるり人の那
 下風よまうしてあうりのやをうきうき
 池あみみとりをいそぐやまたか有
 りみの日を柳舟中りて川をそこお
 柳うみのとを採るといひうと日の月
 沈み静さうかさうきあふ柳うけ
 おりい出さうりのさうかき柳うま
 傾城の賢あうらこのかをきうう
 目あふ枝はく雪や柳の春
 昔柳のくくしてめさふ板戸うね
 引よせてをまうかひさる柳の春
 何ともなうとさひやうきうき

芭蕉 貞室 宗因 鬼貫 季吟 素堂 戈管 其角 嵐雪 冬来 大草 越人

柳 春 章

尺をくりとやうきうきなる柳の春
 さうれくく柳を風舟とりはくく
 よとと川柳とを流るき柳の春
 朝日二分あさきのうとく白ひうき
 と採りをもつて柳かあき
 障子と一月のあひうき柳かあ
 町あうきうき宿のやあうき
 せきまのの尾ハえはけさる柳か
 やあゆの雪柳をうきとすうき
 好く風舟牛のくきむく柳かあ
 青柳れあうきや鯉のきみと
 あうきうき姿ともうき指やうき

小春 一 笑 尚白 荷兮 湖春 素龍 利牛 一 風 杏雨 探丸 一 春水

野老

とこふ 羨声 大糸のまきとひるの
夢 毎ふらとや 野老や 市の中
ぬおしくや 今も 丹波の 鬼ところ

其角
苔蘚
真丸

下着

下萌や 尾こそとゆるのこころ
下着の 氣まをけさや 美めを

二川
李由

若

草

若草や けきのあめ 箭も木綿を
け草ふら川 祓うまよや 羽ふを
ま白ふ若くさこころ 羽ふう羽
ころくはもかたあつまや 二足まて
若草まけふ 春駒のまきけうま

其角
野坡
亀助
問津
良俊

椿

うらひまのまおとこころ 椿のな
曉のはたへみあうはつとまきう那
藪ふくく 蝶まのほくね 枝うま
鋸ふかきまめこころ 花つとまき
まら玉の露まきまつく けりま我
枝るく 伐らぬまを 枝のな
ちり 椿あまのりりさま 續ててる
取あけてるや 椿のあそのあま
徳の枝くまふと ねまつくと ね我
口紅のちり花ゆくま けりま
土まふ 羅ふちり 込つと ねうま
存入や かの 海底の 玉つとまき

芭蕉
荷兮
卜枝
嵐雪
車宗
湖春
野坡
湘木
残香
鬼貫
孤屋
宗因

紅梅

紅梅ハ誰も道一音の染小袖
梅や紅人のけいひの初かみ
紅梅の教くや仙家お庭の雪
お梅やえぬ画はくろ玉と色
紅梅やかの銀閣寺やふれ垣
紅梅や比丘より劣る比丘尼寺

立圃 鬼貫 元永 芭蕉 汴徳 蕪村

木花

そやされくさぬ梢も木の芽哉
木の芽くさる雀かくれやぬひまり
られくも去年の徒競の木の芽
まのめまて四才をまゐるれまゐる

露川 均水 野蝶 玉鞅

若緑

のえやうく神の連ねの若緑
まのめく神のくぬねひねくれと
黒くこの雲のくもやまのめと

鬼貫 末山 土芳

落の塔

駒とえて雪えんは僧ふ落の塔
習まきく土堤の切目や落のく
生てある落のくまの山路くな
その白ひ紙燭清てもぬきのたう

其角 拙候 即草 調竹

莖

莖くくちや五條あつりくま妻の
あつたりを蒸えくくもる明中
酒管く人莖くくの園ふかれく

百里 野徑 露

五加木

喰てあのみややくていりませ五架飯
らこき頃とやこの客をのそきりり

鬼貫
几董

す

み
色

何のきもはるぬよ去身の草の角
終つじと馬あひのくね草草
おりのけお松の葉うつく草うね
草叶小橋あひひしおとやこれ
法度湯の頃より肉入とまを色我
茶茹くすまこれえり知と童比
塚よりあらひ落れはすこれのる
松うけもさくへ硯のそとこり那
とくねるものの中まきね草松

忠知
荷兮
夜章
曲水
野坡
鳴歩
馬覓
如負
その

鞍
牝

は
じ

く

薊

たんちのめさのてらあふぬ日かみ武
鞍草やうこそそのまきねはつこ
あんけい、の物しこの日そ併の壁

普松
栄春
衛門

まきくと摘やはまのくやはつし
はくし頭巾にうあるおしりより
まきくと親子はみろりつし
春雨もたをきおしたり土筆
まきくと案山子のけろと大筆

其角
青江
舟泉
元志
蕉竺

行蝶のと甲りのとまねあさこころ
をらうこの野辺のあさみや隠形鬼

燭遊
三丸

木瓜

草是袋や野のあつうふ木瓜の巻
かけう山の底で焼くや木瓜のこま

銭蓮
芦文

芦角

ゆじまへみくろの角と濱の芦
はりのくわやうろの鬼のあし后

路通
勝重

接

木

捨物や梨の接穂や山をき
はま下のかくしう結る接穂は
世の中をまこえかきかね接木哉
表れさや接木のねの咲かき
一方と梅さく柳の接木の南

芭蕉
傘下
淳兒
清門
越人

獨活

雪間より落葉のうらとまう那
せうなれた身へ瘦ありの似り獨活
いとゆめ白ひまきのうをけつらと

芭蕉
嵐雪
配力

茶

摘

う治よまきて扇風かぬる茶摘れ
柴舟の里へ茶摘の水けあて
藪の根やあけしゆり出と茶摘頃
あつまきや茶山あふりあつぬつれ
たうの瓜もさる日とえらふ茶摘哉
旅人の一筆あてらまる茶つこころ

鬼貫
其角
去来
正秀
委茂
杏西

菜

種

菜の花や一本咲く妻のり
山女の姿菜れをのりら白たるや
なみのむの小樹る角なりり
菜花のむのけ後にくる日影の
なの花は出るやわりのま枝かき
かよの菜や枝葉の土手のあひくふ
菜のむのむの畦らち残とさうわ
まのまのふ菜の花かたれあひし
弄符や天氣定めて種あつ
古河の流とを引つたねあつ

宗 芭蕉
其 角
傘 下
園 水
長 虹
清 洞
不 悔
其 角
蕪 村

桃

我衣巾伏見の桃の老のくせ
菓子多にけり人形や桃の花
おのくの桃のむらうや等持院
ひるふけふのやあつえの桃の花
あつも子もあつのこも桃の酒
桃柳くさりありくや女の子
りのなき境まきね垣根うれ
日の入や舟も見てひりりめ
金柑はまきと盛りなり花はな
梅さくら中をたるまきり
角葉の候ありとも桃はな
梅の歌ふなりなるもとの酒

芭蕉
其角
嵐雪
桃隣
傘下
羽紅
鳥巢
一髮
今我
水鷗
鬼貫
貞室

海棠

海棠の花はこころの夜の月
海棠は女郎と猫とかがあうね
海棠の花はゆるぎなき丸森うさ
海棠の花のうつろやおちろ月
海棠やお八ッうちお堂のあ

普船
卜宅
豊重
其角
史邦

連翹

れんきょうや茶ふ山吹を捨ささる
連翹や柳ふあふふ方響み
且んまきうの白むく庵の風味ふ

巴静
麦雨
峡水

梨の花

杖つらと人のまわりまりのとな
志のこころを毒に似たり梨の花
ま山やけちの流るる水は花

鬼貫
許六
野童

杏

杏はつらと人のまわりまりのとな
杏はつらと人のまわりまりのとな

貞徳
暮四

辛夷

風紅もこころをこころの花なれを
ゆふくれの鳥ふくろりるるう

羽長
梅車

木蓮

去人の葉せんをねん天目ねんけ我
物いそねあやりりく木とんけ

貞因
安静

小麦

草むきやひそりる上はのれりる
ろとまの奥のひるるり雛の夢
一胡よ一はあふけや麦のいろ

鬼貫
泊徒
春水

苗代

杏

苗代よ志のちうふや尻とよとき
あやうや府匠のぼる畔傳ひ
迷うん苗代ころの田代編とよ
苗代や八き組はくろ出雲歌
人取へなるうまりのよたてうね
苗代よまうやかへるの奇の種
なるうや此土をかへて隅田川
晴道やまうう時の角大師
ちとくや苗代まふあくる風
苗代や尻居く行てまよと法之
まといぼや懸るの橋ちりふり

嵐聖
宇角
氷花
木也
元春
徳元
資仲
正秀
仙化
鬼貫
芝村

蕨

蕨

早蕨や海谷の豊ふふところ
里人と相まるとまや独活とま
菜刻この上手と振る蕨この有
まらんや文筆のまら山と蕨
とる人ふまよとまけまらるうひひ
関こそえて愛もあしところさ我
白蕨と砂味ゆまはくふ常うね
小坊さふ足なけからん松よ藤
風なうて静とまきうりあちの巻
蕨の棚やよとくま人のさうね
松よ蕨鮓木ふのほるけいたあり

負室
宗因
其角
幸順
勝政
宗祇
其角
嵐雪
杉風
負室
宗因

山吹

さしこころふる居の後のほろこ哉
とても世と夜ふ深とく墨こもも
山藤のりとのゆくみ成机の甫
あつらかく岩うらやや夜のをま
夜やた君もふれさるむとわれ
山吹や多よささく人き枝のや
月雪ふ山ふき花の素顔よ
山吹の夜へ黄令の肌志の南
やまふれや垣ふ下る蓑一重
一さうと山吹のそく改詠られ
山吹もちるうあふの轉るま

荷兮 宗汎 去来 丈草 七の 芭蕉 生角 季吟 園指 襟雪 洒堂

ほし

さりのたて山吹のそく岩根の南
山吹と蝶のまきれぬあらしうね
やまうまきやそえあふさ流の玉うら
山吹やまうて越ハあふのそこ
やまも婦まきやた久て落る花の水
花ぞもむりふどりく赤はし
裾山や虹吐くあふの夕躑躅
亦これより木を一見のつじろね
白ほしすま移くやうりの角と樽
ま一さのゆさのりさやつー山
さしこのそく窓へはくーの日まら

蓬両 卜枝 貞室 鬼を 半残 宗鑑 芭蕉 共角 嵐を 去来 丈草

鶯

けしきくらしやうき石燈籠
山つじ流ゆきよとや夕日か
まろしけ浪白しきまつしう
花さけハとまももすや岩はじ
あつしはつじの露や羊の乳

桃隣
智月
氷花
幸茂
負室

鶯ふ感あつたけのいやし
うらひとや氷とぬと多と朝日山
英もや茶の木細の朝月夜
うらひとや肉のもまけん汗うま
鶯むれゆとこそそえれゆとり
うらぬおの雪とさ落を垣穂火

芭蕉
其角
丈艸
去来
嵐雪
一桐

鶯の聲

うらひとややとや一声のちふり
鶯や窓のふとをよと念なうら
うらひとやや教よまてうはあひ氷
鶯や門ハうぬく豆腐うり
うらぬおの雪とさ落を垣穂火
鶯の二足よな門くゆつるうら
うらひとやの声よ起りさうめか
うらひとやのまやつらう雪の糸
梅や鶯や鶯のこまおせりそと
うらひとやふましともなまや新玉
鶯やちひされ教も捨つる
鶯れ流るるをりなと糸うら

溪石
魚白
鉄枝
野坡
梅舌
心圭
桃隣
桐西
山川
夢々
一笑
唯然

猫の恋

うぐいすやまの丸おゆる声のしら
うぐいすの梅の小枝よ真冬とく
黄鳥や園柵は翁の笛の音子
麦飯ゆかりを恋ふはどのけし
うき友にわが道で猫のそらなうめ
深窓の頬も紅うやひさう猫
葉巻をくろえを猫のねんりう船
已る脊尻をうらむはうりかひ猫
なれも恋猫よ伽羅燵てうれり
足跡を妻とくは紅く雪の中
維新とて柳うらをを編む数

字因 鬼貫 貞室 芭蕉 去未 園指 牛寂 秋色 嵐雪 其角 沾徳

白鳥

猫のときわのいの見や尺かきひ
うき恋ふたぐや猫の盗くひ
のら猫やうかれゆくちと秋の中
うきをひ濃茶射ふのしらけ猫
白鳥小價あつこそらうみなを
あつ鳥や漢流うまふあひるうら
あつ鳥の紺ふるりのよ水の泡
白鳥のゆき白ひや秋のはし
あつうややあふかす細し
ふらをの骨や式紹う大江中
白鳥や目まてを魚目へあひ

琴風 支考 支卓 野徑 芭蕉 其角 負陸 之道 拙候 荷兮 鬼貫

鳥の巢

巢をとらふ鳥や世とある一ト造化
巢かくるやあままれら々の老るかよを
巢をまーもや子あふは祝るを
鳥の巢よ去年のまよを花の声

昌房
之次
一聖

雀の子

人おぬけ人お別けり雀の子
蠅ららふらふとすめの子願うね
荷鞍ふむまのさくや縁の先
日の新やこりくの上の祝すを
あやや愛ふ敬るふね村とや

鬼貫
河瓢
上芳
珠碩
宗因

百子鳥

おもとりしと羊の冠の百子鳥
玉子鳥都々別の日和の有
川上ハ折々梅のりりちとて

鬼貫
尚白
其角

雉子

父母の志きりふ鳥一雉子の聲
人らとし雉子をさるは体太の声
鶏のをかゝりらん雉子は雛
何のをあま新七移らむ雉子の照
下塗の声よそあらん有部雉子
高声よはらむとあらむ雉子うね
おひ子とあらむは似たり雉子の声
行かして端繩といてなる雉子うね
身ふまひふ雪岡の雉子れみとり武
一をまもて声もあつぬまきとて部
らりじやまふは科ふなれまきとて
ゆりはのあてしきや雉子の声

芭蕉
牛角
去来
丈草
嵐音
一聖
手那
塩車
漱士
衛門
言水
鬼貫

雲雀

雲雀よりの上ふきとくふ峰のま
あふのまよは移てえん跡のまをたう
初とよふ同しむるうろを根のそら
返とくく 時とせけり夕むとく
羽おらけていへへの雲おるくま雀
枝の木と定規ものゆる雲たう
帆けらのせとよりおるてひとり
るあもまこ障子とる日を啼ゆり
棠橘のあくくみおるまをたう
口とくを雲ふかけゆるひとり
羽紅やおうひとりのちとらと
籠よ入とくとくへおる雲雀

芭蕉 除風 丈草 翠袖 渭橋 水花 其角 如泉 言水 梅盛 素堂 定因

帰雁

そのあまも北の帰雁の山路の南
あふこれやおうまかともくろ
ゆく雁や花とくしきの島か
厚啼てりのあおらるやえの
小田久と鉄も柱やのとほ
かへる雁 昇とく勢ひなり
ままわく今や紀の雁いせの雁
行へあさくらとくまはけくよ
まてや厚をれて周防のねりけ
ゆくとと田螺ふらひてかへ雁
かへる雁 富士の裾田の砂ふ
うへる雁 田毎月 月 曇る夜

負室 鬼貫 水哉 未山 其角 嵐雪 以雉 儿峯 楓子 子英 長雅 蕪村

玄鳥

簾より入りて美人小別う 燕うの
影多うも裏ハはくものかうひ
あそふともれともあふね乙鳥
傘ゆ絲ららかさうよぬま乙鳥
はをらうの雁も回てや鳴まう
笑あふまおされい けをぬう
いままこといづねをりのまを
燕や田をとりのくま馬のふと
巢の中や牙と細うしておや燕
からけりも下行くものつをぬう
土車引もも休むはをぬか那
船網よりゆいゆい仲の乙鳥うね

嵐 瓦
凡 非
去 来
其 角
丈 草
荒 彈
俊 似
野 童
峯 嵐
桐 兩
舟 竹
巴 山

駒鳥

琴のねの巢もこころはをぬ
老傍のふ子炊かともまじり燕う
ころ細みぬうとぬるつをぬう
こはをのまふ似合しき白浪
朝のゆや人見ををめて駒鳥の唱

枕 舟
合 志
小 春
長 虹
捷 花

鷺

鷺のうや赤襟うめと日影
様赤ふううとのまや士屋敷
糸の雪はうさやうとの琴の音

三 章
山 只

麦鷄

麦畑うきまふよとまはうは
あしとなく鷄ふ麦の夜明う奈

沽 徒
颯 竹

蝶

蝶のとぬとるり野中の日影うね
移る蝶よるり ちやとるるこころ
く川時と兒のふん出とをさひう音
蝶の舞あつる様ふらふら けふか
とほりても 想とらうこく 胡蝶我
蝶のまてとよま移りけり 葱のまや
初時ものふておく 芥子の二葉あか
かやうらの中飛出うらう 胡蝶うね
枯芝やとち葉ふらう移り 行こころ
空飛して花よせけり 胡蝶うね
沖の蝶波ささるとまてを移り 我
世の中やとるり ちやとるるこころ

橙琴 甚角 柳風 園指 柳栝 半殘 好春 吹玉 百歳 雪窓 戈警 宗因

蝨

蜂

蜺

花のあそび 蛇ふらふらひて 友ささめ
この蛇ふらふらとて 所とて 烟のうら
人もききて 長き日 花あれ 蛇の声
糸ささめ 蛇とて けりあじうる
蜂の巢や 笛さるとて 花ハ盗されと
まふとて 花波の蜂の 往かへて
山吹のゆめ けりあじうる 声
花の巢や 一間く けりあじうる
野田村の蜺 花えたり 花のとて
石の清きさうれ やらまきさうみ
蜺くら知りも 花えたり 花のとて
あまらうら 蜺とて 花のとて

芭蕉 其角 星泉 乙列 杜洲 園風 沙鳥 蘭二 鬼貫 其角 齒亭 好真

蛙

古沈や蛙といひこむあのおと
よーまーやまての林とひかきん
田の蛙や虹と脊負くく啼く蛙
ちんを引蛙ふそめるさきここの有
松風をうちこててまきく樹の奈
山の井や墨墨のこりこふこむ蛙
まこつひて折ふのあるかきんうま
まろくと我頬まひるこのを門うの
あろまきあらううさうふ鳴かきん
しらしひ蛙はくそふ浮きあふ奈
尾を流くまこ啼めぬ蛙う有
とまの江や火と焚舟ふまき蛙

芭蕉 嵐雪 去来 其角 丈草 杉風 工齋 嵐蘭 越人 仙化 蚊豆 文磨

田螺

蚕

自とほいて身りあるかきんう有
から井戸へといひそとまひー蛙うれ
糸の道ふまれもさー虫のからん哉
袖よこそとらん田螺の満士のひぬとまこ
入碧る鱗もあねふ田ふーから
里人の騎おとーくる田ふーお
行きの中ふまきうや田螺とりの
景改々片目とひろふたふーお
孫ともの蚕中ーうふ日向う有
痛くおまきうて冷めてととる蚕哉
とまきあうととるの羽かうー派蚕

宗濑 鬼貫 宗因 芭蕉 丈草 嵐推 交浪 其角 其角 知足 陽和

箸 鮎

鮎の子れ白奥おろるうらま
る鮎ハ特の一葉小足らねあり
水澄き一網の目おき小鮎うま
鮎小の由巻の帯次乳房うま

芭蕉 戈磨 重政 素堂

飯 鮎

いひだこのかあいやめれて果るけふ
飯鮎のおのれ豆くら河内越

末山 沾徳

落 角

一の谷をやまある鹿やあとい角
角もちて大とみまきや庭の鹿
つの落し力やあつるあうれ友
角もちて之日をうは男鹿うお

丁夢 琴風 近之 朱拙

佐保姫

さるひみや京うらへんの奇の母
佐保姫のほくら硯や筆の海

可理 如流

あつき

あつきてふ空初らは色のあふん付
ゆきくや大和四月とかさかま
昨よを貝酒おれありのあつき月
待中の四月もをやうらり月

貞徳 鬼貫 言水 揚水

あつき

あつきあつきこまきあつきの嵐うお
きまあつきの月夜お柱人葉お苗
二月の雪とけてあつるやとらも川
まきあつきおきまきあつきおの羽
まきあつきあつきあつきあつきあつき

芭蕉 蕭山 之次 惟然 千那

あつき

弥生

淮國もやよみの海の道千筋
三月やをれけりまは葉下木
さくららる弥生五日の高きま
富士小浜のて三月七日八日
左義長やこと一の相次帝
左義長のそらゆもあたら
小泊瀬や眼鏡もよその書我
あかこももくろや湖のまはまう
里かよむゆふの松のけりか
行くて程のからぬうきみお

露 去 其 信 旭 幸 宗 鬼 野 壘
沾 来 角 德 芳 以 因 貫 水 交

霞

左義長

花と出で抄へ志こころの
三帆舟と塩尻ふらうの
えうとよふを髪りや十文か
流とてや歩もゆるまは
破見錦とすまうか
こころを安てか
浦くの家お帆か
我宿もよそより
八重かきと奥ま

嵐 其 越 岩 不 冰 風 月 社
雪 角 人 翁 英 花 洗 下 國

朧月

唐楽司の松と花よりおほらみき
夏のしきよ闇のわけくの朧月
大系や蝶の如く舞ふおほら月
おほら月おほら月おほら月
おほら月おほら月おほら月
中川やけしきとらんともおほら月
山のひやたけしきとらんともおほら月
夕かきとみくまて朧とまらうとら
おほら夜と白濁りののまらうとら
朧夜は西のやうらうら猿の声
おほら月おほら月おほら月
朧くとりとれとらとらとらとら

芭蕉 去来 丈草 仙化 式之 嵐雪 兀峯 崩弾 支考 沾洲 女誓 鬼貫

凡巾

義入

物の名は鮎や古卿のしらのゆり
おほらや江戸のくまらぬ凡巾
系はくまらぬ人とおほらやしらのゆり
夕られのりのらきまやしらのゆり
しらのゆり雨のあしきまやしらのゆり
しらのゆり雨のあしきまやしらのゆり
おほらやひとらぬおほらやま
おほらや浅草くけてまの海
おほらやおほら月歌の酒は碎
おほらや我おほら月歌の酒は碎
おほらや小豆の若らぬらち

示因 具角 嵐雪 女誓 園風 トト 其角 琴風 専吟 咫尺 暮村

飯

花もまた埋火の飯をふる飯をふる
ひまな手の徒おきし山とて
傍山の膳がさくまの竹葉を
繁の戸村火跡ちひきけ飯を

定義 其角 野童 荳村

河返

雷やひとむらさめのさえかた
さえくくからさあめさめさ

夫来 橋盛

燒舟

る帝て燒野のあられさるる
はやくと燒舟舟早きつひ
山さると小松の残る舟け舟

乱糸 曲之 下木

雪

間

らき中あられて雪間のよあまうな
光陰の矢間あけらるる雪間う
草莖を包むあもなれ雪が
酔とよて若菜摘る雪間
木枕の垢や伊吹のころゆき
かきと消て富士を纏ふ者胞より
雪残る鬼獄さしき泳生う
舟くの小松小雪の残りけり
軒の雪盗人あせの取のこ
徐々東風くる雲のしときう
暖簾ふ東風ふくつせの出店

きて 兼次 其角 万子 丈草 其角 舎咄 且兼 負室 去来 蕪村

東風

春風

春風や人声くわゆる三笠山
くわゆる風まこころを離の駕籠の尻
まうせふねきもささるね羽織哉
くわゆる勢ふ吹出されたり水の胡蘆
ける風や煙こころあつらへし此声
母とくぬの法師う後や春の風

芭蕉 萩子 亀翁 去来 来山 荻村

雪解

北國の賣花女見まゝる春消哉
雪消て大声あつらへし小ちる春
松の雪ききえとや声をあけろ山
雪くわゆるや蛤くわゆるとあつらへしと
きゆる時ハ氷も消くわゆるとあつらへし
氷消く風ぬおられそあつらへし

沼徳 柳隣 春泥 木白 路通

春雨

不性さやわかきとまゝとまゝの雨
くるさあや田舎のとあつらへし鯉くわゆる
春あけれあつらへしや軒中くわゆるとまゝ
けるさあや山より出れ雲の門
ま雨や何くわゆるらん嵯峨茶房り
くるさあやのとうあつらへし馬のけあけれ
ままとまゝとまゝ九つあつらへし枕の南
とあつらへし守我多まゝとまゝの行所
けるさあややゆきまゝのあつらへし枯つじ
ままとまゝや枕くわゆるとまゝとまゝ本
状くわゆる江戸も陣きりまゝのあ
春雨や流す川入れくわゆるとまゝ

芭蕉 史邦 羽紅 猿 丈草 堤亭 秋色 芥舟 其角 支考 鬼貫 貞室

春 雪

酒をすくわねてゆきけり 其の雪
淡雪や雨ふあらし 春の雪
ふるけしことごとく 初と春の雪
下巻の氣をとりきり 春のゆき

来山 風麥 直重 李由

春 日

かな山やけしゆく 山は春日うれ
まきの日や庭ふ花の砂あひそ
如意橋や衝もかごとま 春日輕
船橋もま日めめく 春のめめ

負室 鬼貫 其角 浜徳

春 夜

其の夜や草津を鞭の音をうり
春は夜ふ尊死口西を守り

其角 蕪村

春 海

青海や古鼓ゆきま 其のこゑ
えは行遠山雲や春は海
松崎や旭ふまゆき 春の海

素堂 芳川 不卜

春 の

其の月琴子物かくそ 春の月
庭より雄客なりけり 春の月
春月や市令堂の木は間よ

其角 泊徒 蕪村

春 月

鐘はらぬささるゆき 春の雪
立舟て淋しかり 春の雪
赤猫のうきく 春の雪
花や根ふさくはく 春の暮

芭蕉 普船 山店 負室

去
の
冊

ふりあたる銀のひかりやまの冊ら
たるの野やうれの竹ふくふとく人
塔の并雀をととるす美世う有

杉風
羽紅
負室

春
せ
る

たるの水も秋の木れをふとやるたを
春はあかりく社書ののちんたしらん
物ゆるー奥の兒をれまのあ

嵐雪
其角
沾徒

水
ゆる
ひ

水ゆるむらや手鍋もおりぬき
汲ふ出く髪とく水のゆるこう有

阿漕
文水

海
雲

りつくよ海雲をよ近き朝日の子
まのあたる海雲まらーうも有

峡水
抱月

海
苔

かきよりの海苔と老の養もせて
海苔とくく水のなふとく都を
人のもよとくれそのちや横のて
まののやうーちふしらん磯訓香

芭蕉
其角
杉峯
尺草

寒
食

寒食のさことひーけふそあひ
ひの火もまゝ食の日も腹を
まゝ食や旅人の雪の路きとを
今安中とるまを食は家よる自方友

桐雨
氷花
月下
其角

巾
餅

雨のよま襪とさくくや草の餅
伊吹山を移る間あそー巾餅
くき餅やうあさーきも冊の白ひ

芭蕉
政玄
埋然

陽炎

枯草やまうこうまうぬの一二す
うけうぬの抱付わつこうころもう有
かまろぬや岩おこしけうけらうら
陽をや足りともつて戻り駕
うけうぬもさし矢の沈む中
おまうぬの登と炉中の香さうぬ
陽をふ隣の葉土入とまうぬ
うけうぬや障子のまうぬ金屏風
陽炎や小磯の砂もふきとてを
おけうぬお夕日にたはけあり我

芭蕉 越人 配力 去来 山川 達暑 犬吠 普船 其角 舟泉

糸遊

二日灸

初午

糸ゆふもむとひはけけるけうぬぬ
けうぬと糸遊やまのむとあま
いと遊やあまきと麻の人けうぬ
糸ゆふやしをあひと糸遊いぬ
いとけうぬや左の人免るさけの爛
小窓窓あるまの日はと二日灸
二日灸糸ゆふのちたふりなり
初午やまの鏡まみハ芝居うら
初午やあまをせんつゆもあひと
けうぬや糸遊をうぬとぬ戸開
初まうぬや稚もあまたうぬつみ

芭蕉 乙卯 氷花 鋤左 其の 几董 其角 支考 野坡 川支

彼岸

御忌

初午や妻の影をむ素浪人
く川午や役の行者はあな路次
初午やその家づくの袖くみ
精進とふとゆれ祝の日暮る船
彼岸少くはくん橋のちりふまり
渡し毎武士はたきあふ彼岸式
携さくひとくみ弥陀のえんか系
伊忌まあり都ふ錦珠数袋
御忌の種ひくくや谷の氷まき
日小霞月か氷夕や山忌の鐘

立圃 佐徳 壺月 蕪村 素山 彫崇 其角 支考 言水 荖村 儿董

涅槃

西行忌

神垣やおりのひもかけを涅槃像
さるはとふ千々々物こそうな佛
孫子少はとまきとてまに秘せん我
まきくたの日和もよくや十五日
このむしや常のさりのめく涅槃像
ねとん舎をばはねうら赤た日の光
天人も泣顔ころろ一秘せん像
釣鐘の文あやめられ涅槃像
西行の死出路を旅のはしあう船
あひよ彼岸さくくは堂ふよる

芭蕉 宗因 荏子 鬼貫 野水 言水 已百 希因 其角 杜若

永

日

永き日也遠近人とならふよや
賦法ののらそとるる日そ長き
日さしはへまらるる速き瀬田の橋
永き日也遊ひて著るより大津る
なつた日や子小はゆいそなうそ

芭蕉 元峯 許六 宗因 鬼貫 道春

出

代

出かろりやその門も雛辰の市
お勢ふや照日お下話そをりて行
出ろりの間やあそふ氣のとれ
出かろりやはをの泊り遊女の果
お誓りやあいのなるとをからけ者
出ろりのふ國司王丸の鳥籠也

嵐雪 知足 淳洋 幽山 葵言 肅山

雛

雛

出かろりや人おくせらも連元くら
お勢ふかろりや繁のゆいそ後
出ろりのやそらそらと古葛終
草の戸もそみかそ代を雛の家
紙うまてあそふや雛のあそとそ
らろりやそや都のひらふま婦連
際く雛えまらほく小家う系
そととりて移ひまきりそ雛の只
夫婦雛むそえのとらけいそせん
幼るぬ成りのそひなりそあ雛
山崎の櫃うらぐこよそ遊ひ

其角 木導 荑村 芭蕉 車末 鬼貫 嵐雪 其角 達暑 霜白

鷄合

改
下

赤いのは五位お上りとり合
現あまひ比目を踏んぢは下うね
改下られて蟹う裾引なとりか
入るまむ舟と陸との改下う南
赤川あ富士のかけな改下う北
きを深まうふの改下や田植く
帯やと赤川おあうゆ、志海下代
響籠うりて改下人の改下うま
ゆふうふ足あとはる改下か奈

笠下
其角
言水
君里
其角
嵐雪
友重
圖指
介我
沾彼
如泉
挑女

美
刀

曲
水

細
打

一の洲へ都の客と馬刀とりふ
あ莖の馬刀うきよせん筆の靴
曲うや見まうとゆやとなまは
曲水や岩おころみゆめ川を
あまふ椿さうね山路の南
畠う門おとや嵐のさくら麻
ちかくと細打そらやまらみ風
畠打や傍う雁おりのかきり
細うやうこうぬ雲もななくみりぬ
なこおとくはれぬの爺や川白
細う川やむうう志賀の都人

鬼貫
嵐雪
其角
希因
大兔
芭蕉
好風
路茨
荻村
秋之坊
乃翁

長閑

人の世や長閑な春日の寺林
肩付の貴世ふりぬる閑心
のころさを物もむりつね朝露の
長閑さや空ふらぐもるの声

其角 冬文 杜國 雨什

刈霜

夕病まつれなき霧の別れの
初夜後花の待つたやにけり霜

千那 松吟

峰入

峯入や一里おろしあけ小山伏
まひ入は花踏てけり素足う有
峯入や雲ふ起卧とき人もあり

芭蕉 六亀 重頼

行夷

行夷やまの帝魚の目とらふみこ
ゆくもや猫を雄島のいそれ貝
明ぬ回ハ星も嵐もころるけりら
初ころる底のぬけうけは枝う有
まらあふぬ名を引春や親あふも
引春お頬 忍なほかろ川う奈
ゆくもやもむる朝の野守う船
行はるやをさきうおほく鐘の声
ゆく夷の夜を結ね敷の離うら
行まよや横河へのあふらも神

芭蕉 其角 犬草 支考 暮四 湖春 野水 山川 鬼貫 芒村

時鳥

古今續五言題後句集

夏之部

うらみとの娘うらなわとくまは
 口多く水鷄ふなとく人郭公
 ほとくまき歩大井系をり白月夜
 夜の候さゆひ白し本さまは
 なくふまき人笑つゝいらふ子規
 たせうれの聲つゝうひうちとくたを
 蜀魂子川中ら淀の水とくま

守武 宗鑑 芭蕉 鬼貫 貞室 一幽

在明のおりてあこもやちとくまのこ
 御成筋いかなる体まを子規
 ほとくを神樂の中を通るり
 親を谷子の山あめれほとんを
 泣けあまふ啼り郭とく
 時多その目くのちろ糸う直
 杜宇とぬ夜かきくかくら我
 うくれあそ山久とれ々蜀鬼
 とひあんとよまうみやこの子規
 馬とらぬらそり合らりやとくを
 くらりりやかくあまきとくまを
 致至くまき麻さめうつや時多

其角 嵐雪 女札 正由 利冬 尚白 宗因 去来 犬草 鈍可 一傘下 襲

ほとくまをとれうらまむ野の鷹と
 あひし子の口まをぬや郭公
 目あけ昔あ山をくまはる鯨
 ほとくまは一声まは雀の声
 石昔の朝露かち一本とくまは
 四五月のうらまさと浪や郭公
 ちとくまを女まを定まらぬ宵の雪
 松島や路ふ身をくれほとくまは
 星とく門啼りしあや四の鬼
 杜宇なう糸あそくね月夜うな
 湖をとくかくとやあとくまを
 知候まてはまのこりそと子規

柳風 松下 素堂 杉風 惟然 詩六 卯七 曾良 團友 朱拙 樞先 智月

左羽山花ぬけはほととぎす
郭とあうぬ秋あはれ朝然ら
雨の間に常あそびたりほととぎす
何きまうぬらう流のをりもめり
あゆひと心森とあはれは郭と
啼うう人妻もかひくうおととを
付鳥窓くらうううう人ともあ
昔らもや舟形ううかお子規
高きやあれうれ中の杜宇

野坡 支考 風園 荷台 北枝 正秀 土芳 素翁 洒堂

閑古鳥

老学

啼出してとめ口老とねかむこき
谷こーや空ふく風のうんこき
閑古鳥の声か脈る山崎うき
なげの淋し啼程の淋しかんこき
風ふうぬ森のあしや閑古鳥
杜とては山田も青し宗古き
かんこき啼や蛙の目かりとま
草卧く芝母終うし閑古き
山中やうらな花と老く小六ふし
口老の似や老の学おとりのこと

釣壺 乙物 鬼貫 瓢界 其角 舟竹 洒堂 正秀 支考 宗因

鶯を入

うらひさの音を入の中へ二ッ星
鶯や音を啼こ入と昔仲

嵐雪
白水

鶯雀

あし鳥や日のさし廻る夜の庵
よきまのりも小野とへらし渡の中
社まののゆめと我をまきましくし

錦水
行雲
芭蕉

翡翠翠

河せみのとよとよ麻のひ蓮う形
翡翠翠に折うけ電の友藤の糸

栗言
酉花

羽抜香

羽ぬけ香啼香そりそりこ崎
そころもの松をわらや羽ぬけ香

其角
希因

鶉

えぬ鶉のわびし小のり舟の
鶉とともおとろの水をくく行
見物の火をえられとる歩の鶉なる
簑笠もあら鶉はうのや川おし
曲江舟のつるえぬ鶉も採り南
先舟の祝もかまのね鶉舟か系
鶉はうの斤手くささるか
鶉縄むく淡ま多や二とあり
鶉数小早瀬とみゆる鶉うけ
かアアよえ面に鶉匠のうををり
らもはうれ鶉網も眠る夜唄うた
あまうち鶉とせり合ねるあ

其角
鬼貫
去来
李田
梅餅
淳兒
独卜
桃隣
園指
琴風
氷花
尚白

水雞

雉さきてあまのりふちりみ水雞な
おのゝ尾の尾やあ鷄た儀の園
冨守の宿をくひらふ二回をうり
めりともちちりく射る水雞
うーゆより戻りかきこみ鷄我
宵のには啼く曇るや鷄こひる
水札啼て日教ちちり流る有
けりるのそ神杉ととまきこるは
りち川や雉の浮巢ふなく性
亀の脊みたるうの雉の浮巢お
鴨此巢にまま管かきこ小西る

土芳
本草
芭蕉
去來
半殘
北枝
一泉
尚白
其角
肅山
一柁

水札

あまの巢

螢

おのゝ火を木この螢や花のやと
あゝる火や吹ととまきわて雉の園
簾ほくそ朝くあゝる螢う有
牛部をよととほ草のほくそ
けーととと螢のあゝる谷のあ
相のあま島さーあゝる螢うれ
草も木も螢くまうやあゝる音
田の取れ豆はとひけけととと
かまーととを生れつまうとと螢う奈
あゝる夜と下ととりのり茶う奈
夕園ととけとととあゝる酒をやし

芭蕉
去來
言水
史邦
正秀
万平
猿雖
踏歩
舎咭
水鷗

蝙蝠

羽蟻

水辺を付とる是のほくろ那
菽垣や卒都婆のゆひを飛蟻
石山へまことそ那くまきあふる角
飛くけり筋ちうふなれ蟻のま

宗因
鬼貫
嘉元
袁左

蝙蝠や宇治の晒ようどくろりて
たう告く夕うけりおそくそ風
かそりのや向ひの女房とらをんる
蝙蝠や月けあうりをまきまに
羽蟻とまや富士の裾野の小家より
とんでとて近道とてるとありう飛

其角
子英
暮村
曉臺
暮村
林秋

蛙鼈

ひき

子子

蚤

明松おあから樹丹かぐらぬかへ
あまかへる折を落く益もろく
まふう啼とあひあふらありあぬる

芭蕉
其糟
涼佈

ひきをふんで夜の卵は花とあのみ花
夏まき耐はまきの遠きも西夜我

其角
曾良

子子や流くくあものらめとまき
ほくろりのくくや浮世のうめせ貝

氷花
重厚

蚤ちくみ馬の尿とれほくろえ
隙あまや蚤のまき行耳の穴
川越や蚤おつうはく横田川

芭蕉
文州
彫棠

蠅

夏
母
じ

うた人の旅少もなう人木音の蠅
かほ母はく飯粒そ人よあこ人まの
蠅よいろる眼よ力なれたる麻う船
珠数くろて蠅打人の片手このま
浦風やわらうた人とのまは際
そ人打その手枕の福うりこのま
うらうまきまう子の息は蠅うこ人
苦うまや毎まうけ行午の蠅
電のさきひおしくや火とりひい
あふ夜まや鳥もいねろふ火取虫
たまふこまのてまねう火とり虫

芭蕉
嵐雪
子堂
西軒
依水
已百
紅雪
九節
犬草
翠袖
正秀

蚊

蚊
柱

宵の蚊もはらうをうらるハ声う船
蚊をよけて蚊の齧やほととぎさを
旅人やあう川き方の蚊はゆい人
血をまけしめとちちを蚊の傍さ
蚊の群を梅の一本の曇まきり
子やまうんその子れ母も蚊の食人
蚊のイセま鏡のうらふとまうりけ
糸やの蚊や御佛供焚うまおしく行
蚊をころと中ふ蚊明々旅麻うま
蚊柱お大鋸屑誘ふ夕部う角
蚊とくらも夢の涼摺かゝれあり

其角
鬼貫
治荷
丈草
小春
嵐紫
一笑
一鉤
昌碧
宗因
其角

蚊

旅寐して香つらな草の蚊をり哉
故中の木や芥子女の石取らうり
蚊を火お森ととらせまうらうり
うやりの火や蚊をける方に老知とら
指らひー荒れも出らうり古の蚊をり
草の戸を念佛の中もうやりのれ

去来 嵐雪 杏雨 其角 鈍子 三翁

蛸

蝸牛角ふりのまけよ須磨明石
枇杷の葉おをと直六角なき堀牛
世ふはれて踏ふみるくかとははあり
まゝ露や角に目をりらうりまはあり
堀牛角ぬく夏の葉も死う那
我むらう踏はふらうらうかとははあり

芭蕉 其角 大元 嵐雪 水鷗 鬼貫

蝉

撞鐘もむくやうらうり陣のとを
陣のまふ武家の夕食さよたり
ゆとりてよ筆捨松ふせまの声
さく陣のその木ぬもまゝ居つらぬ
捕もうらうやうらうらうらうら
せこ啼や麦をらうらおとこ
啞陣のなうね梢もあら見取り
月月うら夢えて飛々陣のとを
せみうらうやままおて眠る松の下
吹あうらう風ぬたうらうら陣は麦
陣なうらう布織窓の昏附ら

芭蕉 釣豊 宗因 鬼貫 昌碧 嵐雪 杉風 正秀 可吟 如行 曉鳥

空

夏

空

蝶

鹿の子

更衣

鬼灯のからをさけくや蝶のから
 空せりや石の鳥居を啼捨り
 蝶のからけりけりけりけりけり
 目の玉をとんとておろり蝶のから
 破垣やよきと廉子のからし路
 おろりしき角ふなりきし廉子か
 鹿の子や麻正出まき青葛
 一ッ脱くくくくくくくくくく
 はくくくくくくくくくくくく
 春と夏とよき人ゆきくくくく
 鹿の子見もかりのゆきくくくく

其角 二井 旬空 田高 曾良 柵雪 野坡 芭蕉 正式 鬼貫 宗因

ゆきのゆき布子賣をしとろもく
 扇をの暖簾あろろしとろもく
 あろもくえんえんえんえんえん
 帯ふるししきくくくくくく
 夏衣襦もをくくくくくく
 とくくくくくくくくくくくく
 雲水小打廻そめやあつゆもく
 とろもく人をとくくくくくく
 あろん著るを紋もよりや夏衣
 身をかくくくくくくくくく
 綿をぬく旅麻のせいしとろもく
 とろり子やあつゆのあつゆ衣かへ

杜國 嵐外 一有 傘下 野坡 秋之坊 琴風 龜翁 且水 九郎 尚白

給

青

簾

獨を野おとてこれとあつせう有
一日より花よひさしきらりせうま
てらくくと空一志きり給う那
給着るや十里をゆらん朝こころ
ゆりくと木目んえとく給う照
日おかけて黒きゆりせも似合危
かこころの中ぬきから給う素

らあささらふ青まらなれうとれ爽
其の給よりもあれし青すまは
あの日此給妻とるせしきとこれ
さうのまふ千尋の彩や青簾

嵐雪
鬼貫
園友
独卜
此筋
湖水
素然

月下
吟松
丸治
希因

葵

まは

くや夏の入口涼し青とくは
まを簾くつた坊らもくはまじ
呉竹のよりに葵のきりりこの有
下くの中はかきも葵はつりや
松原山田舎すはつりや登休三
園くのもあふやあやありま山
新めてらやはつるはつりの車我
午時を宴盛みなるあふこの有
平うゆり祭うけりのあはひう船
あつらひて鬼おさうりてはあふ

桃後
支考
携良
曉臺

角
定克
白雲
玉笑
新美
古庭

卯月

あけひ物と木さや四月の櫻うり
此ころの肌着身ふあむ卯月うれ
白雲のくもや四月のすく山
山城や卯月くもりの雉子のこゑ

芭蕉

鼻月

たましくふ之日月をうむ五月この角
かろく身を風のせむる五月哉

去来

水月

六月や風みあふ且みあふ秋まよへ
こゝろの月やうつろを流るる年こまれ
あせ月や指とりのりの風ゆるまき
みな月や朝起しころの大書院
六月や磯ふ雪りはくまをこひ

鬼貫 素堂 杉風 惟然 怒風

夏宗

名を佛とて身の上のよも夏宗なる
名はしめや先ゆく人を思のち

重則 言水

夏書

日次りつてかきける筆の夏書は
はくくくと夏虫のあては命うき

蕪村 兀峯

灌佛

灌佛や籬子合をる数珠の音
灌仏やまももころけも二年哉
灌佛のそのころ清くあつたね
灌仏やまも入相乃大月はとけ
灌佛やほし並つる井戸の玉根

芭蕉 之道 尚白 百里 曲翠

流石堂

灌佛やほし並つる井戸の玉根

新見堂

七堂小堂存へ余何や新見堂
脱捨と夏の住居や花見堂
驟つて軒をぬく夕や夕見堂

麥林 涼備 分江

新茶

はひてくる袂をかへて新茶うね
起くのとらぬ宿の彩茶うね

考逸 舎羅

葉撰

栂の戸をうめぬ葉撰
大敷はらうたかへて葉撰の葉
扱葉のそり踏ありくとそりうね

嵐竹 史邦 山店

風呂

夏風呂や清水寺とふかぬれり
風呂の茶は夏目もらほ細工うね

宗因 重房

短夜

みくろ夜やかめ五文字小明石澤
こころ扱風二階へこころ上りきり
短扱風吉次冠者に各残りね
こころ夜や木賃もまをそとに
みくろ夜やまこ白粉の香りのそり
こころ扱風床の里も朝露うね
短夜の声なま長一馬中
みくろ扱風百合咲くけり明あり
みくろの夜やこけ火の薫るる里
こころ扱風あま手筋や旅の姿
みくろ夜や小見世明る町とら

宗因 末山 其角 惟然 一帯 千霍 清内 林陰 且葉 音宵 甚村

麦

穂

小角豆

行駒の麦かかきしむやうりう系
 はくみ合ふ子供のこけや麦をこけ
 地あらしやさうさう小足も麦の秋
 家のしほの麦や穂ふ物く夕日乾
 一帯とれや鳥羽田のことこしき
 麦らのや内外もたれ志賀の里
 あけ土よりの穂とく麦一穂
 しら雨か牛もようさる麦野う系
 燕や日づけかとうれさうけ垣
 小角豆垣妹く垣根のあまふきり
 くらねてのまに葉のたれまけれ

芭蕉 遊力 此筋 夫草 之道 重五 玄寮 枳風
 鉤雪 心棘 龜翁

か
を

鮓

かをを賣りいくなれ人を酔きん
 二の富ハ廓へもちど初かをを
 下部多ふかをを食さる日や佛
 麦物もて鮓よて食ふ山家うあ
 うをよめせむたれあち下しせひ
 漕はけと岸のたりのかををこり那
 かうこひても先達船やこり門鯉
 やあまけはくく夕さのかねは鮓
 鮓桶やなれをとりく後あしあ
 指上り鮓をひくくや毎のはりゆ
 ちんちんでも石かなるや鮓の鮓

芭蕉 沾洲 嵐雪 花紅 百里 紫紅 岩翁 宗因 宗因 妙高 貞頼

蠅

幟

昔柴と蚊をみもはるや八瀬大赤
管えんや松よかやはふる昆陽沈
らさう庭をさうー入れり樹の中
蚊の声ふのうれさまほしてかやむとく
老は身のささみふや蚊をのそは
花あやめのほりもかをる嵐うね
うのまじりやとや帛き紙幟
雲うとよまの穂えんをて帛のあり
左右さふ横雲こころおれりうま
茶いしうの中ふまうる帛のあり

去来 鬼貫 車来 曲翠 岩翁 其角 宗因 文鱗 百里 芦本

粽

菖蒲湯

葺ふるや豊の粽は國津風
上ろくろけや粽のちとれやう
めりやくよ粽とくなりゆき中
下さるる初物をやー柏ちり
山笠のゆひあちうーやちり菴
物さーと粽を切やお乳交り
鈴りちりはちり出くは粽う有
揚りうふ帛あちうひくちり我

志中うふ入る湯次りひたり一鹽
らくねよやうふの浴お蚊う速る

鬼貫 西吟 路通 蓬西 トク 玉笑 菴尺 南盛 荷兮 菜山

印地
らち

子小似る子のかとうとや市地打
かそーの嵐と印地かうらう好
年ふるま人のと好しや市地打

仙化
志
溪石

競馬

競馬時入牙のりまみう那
人の世もかうくじけくく人る
競るおよなうはこいふこいなる
唐人よ一度こせうた競馬う好
けしそんく房りの陣の断うな

其角
山川
土芝
草士
朱紬

竹醉
日

西雲や竹も酔日の人あつぬ
竹うらやまよのせくる茶碗酒

其角
野坡

五月
雨

さみとれふかき色ぬりのや徳田の橋
五月雨や蚯蚓のと海と綿の底
さつを雨も降るりとおちえりり
み月雨ふ洗しや紀伊の八莊目
はそとれいたる武系地の秋徳
五月雨を堤やまきこ一夫の川
さみとれ何を茶ふ級海の人
五月雨小柳まきりまこれ汀う系
牛もかきしを羽のあうり此五月雨
海山よまきみこれそあや一トうみ
かほぬらか田子のりそとや五月雨
み月雨や柱目か出と市の家

芭蕉
嵐雪
鬼貫
去来
宗因
望一
鞭石
一龍
一鬘
九飛
其角
松芳

五月雨の多や淀川大井川
頭をさけて馬もあやや五月雨
はみえねえ持あつらふらふころ

挑隣
荊口
里東

夕立のかしら入ふははりの角
宮崎や岩とて雲を入梅あうり
双六の相手を嘆息とむはりのかき
桐亀狩夜あまを起せばはりの我
松風や入梅ふりの日の交曇り

丈草
養浩
胡及
銭生
文丸

虎
う
あ

虎う袖をうあああ降る
降りの中ゆる死名や虎う雨

鬼貫
一声

入
梅

五月
園

五月に園あ難くらなう人の家
たろくし峯ふ下結をく五と雲
さけもみみ挑の虫をのたらん

舟泉
探志
樹下

夏
の
日

夏の日お嫌き餘のりやう那
なつこの日やまじく死くよみろは
夏は日をまきとも勝田のあのみ

嵐雪
文里
鬼貫

夏
月

蛸壺やとう形ふ夢をたふの月
明くのか家お伏見や夏の月
あつのはや東へかりお月を西
城下や笛きくそあつる川の月
たあれは酒もさあつる夏は月

芭蕉
嵐雪
宗因
露白
桃隣

夏野

馬ほくし我と修ふえる夏野うた
粘まこと麦とくまは交野を
柳うらと音や夏世のまきりく
のうのちの荒くむきしれ夜野
なつ山やうも井おほる露の
花をしむけお夏山の栄う
なつ山を窓さの枕屏風う
雲雀啼くめと物とと一夏の山

芭蕉 生林 元灌 史邦 支考 鬼骨 宗因 卧高 平角 秋風 露宿

なつ山

火串

やまら

田植

投ら目とてりうき命や梁の鮎
目通りののをうの榎や梁さう
牛あうは声もくうしき田植う
渺くくと尻尻あうう田植う
板なりおせりあうりう田植我
昔響るやせんあうあう田植
陣くくと笛うのまめう田植
露の系あ小電おさうう田う
山吹も巴もあうく田うあう
菅あまのちを脛よりを田植
白うけ声お尾のあう田植
風流のをしめや奥の田植

此筋 其角 膏車 曲水 丈草 正秀 示蜂 立竺 許六 管吟 鬼貫 芭蕉

早乙女

早乙女かへく取くる菜飯を
志はくも早乙女らるる清田の
早乙女の手てせりゆのよ川に支
明る戸や早乙女ぬゆる其隣

嵐雪 景道 彫棠 百里

早苗

西う東うまの早苗も風は音
菩薩とらるるや及の餘り苗
燕の下腹さうはさるる那
ゆわくや柄ふきまると早苗
ふとる身の植おられは早苗
順れう棒入けり早苗うち
とらるる雲ある谷の早苗

芭蕉 乙刈 胡布 冬市 魚白 琴風 紅糸

青田

里の子う燕撫るさるるこの南
親は日の寺へ助はる早苗うお

支考 臥草

谷風や青田を廻は菴の客
畔豆もまもみ潤る青田うな
ぬれ髪はふらまよ門の青田うお
氣帯てめともまらるる青田
凍さるや八人代の田はあをみ
橋の小さ島の崎も青田うな
ほき栲や田草もらるる水
田のらまよおられく富士詣

丈草 楚舟 汀鶴 桃隣 荒雀 知足 山店 奚魚

田草

扇子

扇

袴合ふ十二の骨のあはれたの那
 手とさきひみ襟の跡ふむ扇うれ
 さうはまゆ中扇はうけてまうと涼し
 りうとまきと饅頭おのきあき我
 扇折子ふそんうき化粧うそ
 小秋ふけく肌のはあさる扇うね
 わあけくしりくく玉地をあら固
 青丹より白たうらうもなうそ
 らとさあふらうらいのあさの白ひえ
 かみきよりの男ははまはらうらか
 傍草ふらうらふさきし出る物うそ

守武 宗因 大叶 草士 尚白 泉門 宗因 来山 其角 左志 一峰

紙帳

帷子

祇園會

夜くや寝人紙帳か風か入は音
 故ゆらうと人かかくら紙帳か
 おりふこと糸帳ふらけと送りた
 かさひらの四五六月のされみう角
 帷子あめうはりまら日出う那
 うとゆらや佐保と龍田の留は姫
 祇園會の山路よ入るや大徳なる
 るらとや山木はある祇園の會
 祇園會や林のまゆくし手向山
 立白もとも踊るやまきどんの會

其角 負長 野徑 宗鑑 大草 青峨 宗因 梅盛 如負 嵐聖

氷室

水の奥氷室より河ぬる柳の那
ちりはめて千年めれる氷室山
ありくもや家も冷水中りち
湖や暑ををいひくものみ松
雲の峰なりんや嵐くくも
夕く終や元くひい雲の嶺
くもの峰空ふらぬのりやはたぬ
柴刈くくぬるもあはまの峰
雲の峰腰くけぬるもくく
雨乞小先まらるや中まかき
あま乞や近江となくし川の敷

芭蕉 貞室 溪石 芭蕉 鬼貫 去来 桐雨 明水 野色 犬草 乙洲

雲の峰

雨乞

昼寐

土用

虫了

山人の昼寐を志すは葛かほら
かすひくの洗濯まらぬる寐くれ
まてしす小額あきゆる昼寐くね
白雲の天は源平土用う那
寒と晒し土用の中かはうりか奈
捨人や本草にかきて土用了
のりかたは時代と違や土用をし
らけり香や虫了もせしむくまの
内張の浅はぬまや土用はし
虫けりやせめて夏あは清くさる

挑妖 昨非 予仰 望一 許六 其角 杉風 トク 理性軒 肅山

暑

あけき日風海ふ入り最上川
焼豆腐うまくてあけき夕日うね
葺の二家あふうらぬあけきう那
とん庭の砂あつうらぬうらうま
あけきこの藪ふく風そあけきうり
かんとらうの暑うらと石の壁とく
照射てあけきうらと海のうへ
あけきあけきうらとあけきあけき
及とらうあけきとあけきあけき
元山あけきうらあけきあけき
あけきあけきあけきあけき
馬の目はあけきうらあけきあけき

芭蕉 宗因 去来 荷兮 野壺 鬼貫 嵐雪 氷花 許六 猿雖 里東 牧童

あけきあけきあけきあけき
田の草あけきあけきあけき
蝉あけきあけきあけきあけき
あけきあけきあけきあけき
並松をえうけあけきあけき
草のうらあけきあけきあけき
あけきあけきあけきあけき
積あけきあけきあけきあけき
あけきあけきあけきあけき
あけきあけきあけきあけき
あけきあけきあけきあけき

暎 望 之 道 採 志 溪 石 卧 高 我 峯 乙 刈 車 袋 蓬 船 行 寄 其 角 素 堂

夕立

夕立の雲もかゝらざるとの空
ゆふのまよとや何處よ下詠とらん
白雨や障子めけられ片窓をじし
ゆふのちよとひのく月や松の上
夕立らにむらり外なるとんまうお
ゆふまふ下傘ぬき垣徳の那
ふ雨の跡おり後や堺らら
夕立ふ追らむとてらぬや村うら
ゆふのちや鋒をきくは流し守
ゆふのちや坂行駕けけしきん
ふふふさしぬきぬきぬきぬきぬき
夕立の原ふおぬきぬきぬきぬき

去来 鬼貫 嵐雪 大州 其角 傘下 愚哉 隨友 仙化 山川 沾蓬 荆回

簞

竹婦人

ゆふのちよとひのく月や松の上
白雨のまよとや何處よ下詠とらん
夕立は跡をて廻る山田かな
ゆふのちやとるれと牛の門ち久
夕立や樽の臭の匂と志きり
江山や沼津の屏風もろひとろ
さうなみや近江おりて成 簞
ゆふのちよとひのく月や松の上
ゆふのちよとひのく月や松の上
抱きかゝるも枕敷なり竹婦人
抱きかゝるも枕敷なり竹婦人

去来 鬼貫 嵐雪 大州 其角 傘下 愚哉 隨友 仙化 山川 沾蓬 荆回

涼

破風くらみ日影やよるとれ夕涼
涼しきふ榎もやね木蔭るる
とくしとて涼しや宿の這入くら
ふは夜沢とまりにならふ涼なる
かけ涼し松原さして落日和
まね人と謡同答とみかる
大ぬぬや沢追ふ秋のそくみ我
とくしさのかさまりをねや夜半れ包
翠簾うけて維妻なうへ涼三舟
水と羽と合はせ行轡や夕とみ
小屏風小山里とくし腹の上
おもひとのくふ達より夕とみ

芭蕉
玄白
荷兮
去来
宗因
鬼貫
嵐雪
真室
秋色
沾徳
丈草
如風

風

とくしきや櫓の下ゆくあつめいと
涼しは風口をわけてめは川辺る
桃燈のとこやらゆりさくみま
船涼三船かきまはしと沖へゆく
管涼し櫓よりのそく茶の白ひ
我舟と涼むまなかり涼し守り
洋や魂なると川さくま
とくしきや帆又船はちくし髪
琴ひして老をかませよ夕す
半ぬかたれ合夜そ朝露夕とく
とくしきやうらうらとゆきとあり
涼しは舟す川をほろりの口れ砂

俊似
未學
卜枝
枳風
巴山
トト
柴栗
甚角
智月
支考
里東
句空

風薫

打水

このあつり二三度りとはすくえ
きもさねお本城さくや風の音
かきしらる脊中あは涼みう那
ころのねも尻吹くさすみお
散をさくさ一度涼む戸に我
さくさく物ら声さ瓜の小玉
けく浪や風の薫りの相おかし
目お耳おああ風はかきりぬ
帆をかきる朝のはらや風薫る
うら水ふのこたさみや梅乃中
あつりやさくの垣穂ふ夏の月

野 山 衛 一 土 鉤 芭 鬼 甚 又 卓
 川 門 葵 芳 壺 蕉 貫 角 草 袋

心太

菜瓜

沖繪

かきや祇園とやふあつり
血舞ふ鬘のけあけやさうてん
多門のらちか呼せんとうてん
柳らとけ荷と涼とさうてん
鬼のまね玉あもあも
白くてもあき味や
さうてんさうてん
茶はさうてん
昨徳利の水さあやちを沖繪
沖繪さうてん

宗 其 芭 鬼 去 正 儿 曉
 因 角 蕉 貫 未 秀 董 臺

清水

城めとや古井の清水まゝの洞人
抜とりをあり後清水の片草鞋
まぬくの下の下もあふぬまゝのれ
六玉川高野の外に清水ありな
とみきりて塩子の沖は清水哉
帷子の海苔をてゆくまゝのり
直雲をぬくまゝの清水あり
連あまこまゝをて結ぶまゝのり
松風よ袋の行よは清水の有り
我跡に缺層たもよる清水あり
山蔭やまゝのりよ音をたも
海みとえてまゝのり清水あり

芭蕉 嵐雪 宗因 去来 俊似 尚白 一文 澗道 許六 卯七 嵐水

汗拭 晒井

旅人の足あとよる清水あり
あふみの跡に清水あり
此夏の様は下ゆくまゝのり
落合とまゝのり清水あり
はらじ井や底より寒い人の声
まゝのり井や男あまゝのり
尋常の和巾さゝまゝのり
扇折のりま持とれあせぬら
生の松のりにまゝのり

仙化 其角 沽徒 蕪村 桐西 嵐雪 汗々 嵐雪 午那 其角

夏瘦

夏やせふ能因あつも小食あり
かな瘦と云とる人と見ゆきとや
多門やせやとぬ唐士の半妃とふ

其角
風子
友酔

川狩

川狩やまのらうし流より手柄とる
川より中をとり木蔭ふま涼と

我峯
愚心

秋近

秋のこゝろとまよふ秋近と改とん
飛かへはとんはのまも秋らし
あ

此筋
涼帝

不二詣

秋の雪ふよきと雪危と富士詣
角帽子雪と調むやあし詣
武士より川越とふる富士まうと

其角
素堂
翠

法被

人並の端をも越まり街被川
夏らしらひ目の行方や流路高
破と扇一度ふ流と御被う南
吹陣の合羽よそよくこそ死川
らと母まし豆腐とりまく山被川

宗因
嵐雪
未学
其角
琴風

井
盆
盆

卯の花も後摺寄しと川流山
うねらねよとんとまをぬる床起
弁のともや隣ありまやぬれ嵐
卯は花や酒のあつは花の跳
うのともやあつのりこも体曇り
知れぬのまあり持かたのり毎の垣
うのともやあつのりこも体曇り

去来
枚風
之道
楚舟
支考
土芳
野坡

若葉

あつた西の傍にね松柱の若葉我
ゆき一室にさる葉のほふれあきあけ
ひとしきれ葉もうちほくころそか那
わあしとらして葉よれとちあふらな
おのひこめてみるきむのあふふ哉
若葉あふく風やふゆとこれ刻よ
非情あも毛泳き枇杷のあふふ
まうころそ我の牙延のあふをうん人
きの株のあふふとこれわの葉ころあ
若葉あふらささふあめのみ木う那
夕まふころ葉のう人の若葉うね

素堂 其角 楚舟 定良 宗因 嵐雪 鬼貫 敬西 不交 藤蔭 荊

若楓

僧正の青にいと人やころか
物食のさむしあふらやまろ相
馬ゆふあふら折くやあうか
さのけなれ針事ころとわう楓

其角 嵐竹 卓袋 現琴

若櫻

葉はうらにふゆらや葉のあみ
あふととりの散のころても桜うね
とちあふらや植け存家のうとと死

鬼貫 沾荷 蝶羽

若楓

ささふら実冷ふて暖らん若の山
山楓實のあふらとちあふら

一鉄 彫棠

茂

嵐山藪の茂りや風ぬさち
川草のふまきさう白み茂りかな
神くくと春日ふけてはくちあぬ
ちけりゆく草津の蛇や雉の晴
光こみあふ二つの山れをきりこの那
花のいと今朝の旅をとの茂り我

芭蕉
嵐雪
鬼貫
宗因
去来
子珊

夏木立

まのこのむ椎の木もあり夏木立
にそけの本社らしうらなう木立
鷺の羽は浅黄小吹くや夏木立
夏木立とらとら木立くま猿の声
蜘蛛の巣のわづきりのうり夏木立

芭蕉
昌維
希因
安枝
鬼貫

下園

須磨寺小籠ね笛まきく木下園
秀雨丹木の下園は氏帳の糸
下園や牛は御前を履へら

芭蕉
嵐雪
百里

青嵐

うき雲や左右小別まで青嵐
麻路巾吹落しきりまあふじ
色としもまうりうろおあを嵐
雨をねて松の白ひや青あふじ
梢あを破風の光りやあを嵐

史邦
巴流
嵐雪
支派
百里

常盤木

松風の落葉う水の音とらじ
夏こらふ常盤木あめらうも常盤木

芭蕉
貞室

桐の花

かみまりののちりて曇りし桐の花
桐の花青をとりてせせとこのひねり
堀こし小大工はつひやまりの花
此うちの降る南やまりの花を
茂る木の中ふかりぬ桐の花

史邦
猿雖
因友
子兼
トシ

花袖

袖の花は昔ちのそん料理の写
ひはちや度へりつるついであり
行ふもこのひ花袖をまゐるひと
袖の花よ仇名あは酔ひうら

芭蕉
彫棠
言水
佑徳

夏栴

蓋とねの蚊の花井戸や夏栴
税ふめて風は夏あひらう折

一嵐
涼体

青梅

青梅やたのれう空ふあはまき
まじりや乳母うも妻のあかくし
あは梅やとまりのれう松

岩泉
幽光
入松

櫻

櫻佩てつとめうらやあは者
下物のしらうあやしやるる櫻
うきまやあちのあまきさの声
温飯打とまりのあちのあち我
水ささこのうらう櫻のうらなのは

嵐雪
白雪
因友
素寛
平吉

栗

世の人はうけぬるあやの栗
湖はうまきはちるも栗はうら

芭蕉
胤弾

合歡

泉深や雨よ西越る梅ふのを
合歡の本は梅のてねむ清き哉

芭蕉
仙花

覆

盆子

枝椽や借ふる一をのいちこ
手の跡を忘れず甲斐のりちと
鼻紙の覆を盆子に添ふを赤哉
水うれば澁をとりのまぐいらと有
井の底は蛇と忘るへ一蔓のらと

重則
陣由
朱由
杜池
山川

ちあう
むむ

古寺や傍るぬめりと椽椽のむ
掃るのうかい日ねくちあうむむ

三園
度江

柿のむ

此中の古木のりつれかきのと那
椽は花蟻のらうとととう休る

此筋
可廻

百日紅

さねうとも花ふはあうぬ百日紅
ありふをや百日紅の敷る日まて

其角
支考

燕子
花

杜若もけみ弁白はかひひあり
とねはけく蛇のゆくとやかきうと
かよはぬぬかたれふをしくよ杜若
獨あるふはけくせんかやのま
植るりるうぬ研まききの燕子花
吾をる此下よかく形りうなる

芭蕉
大草
嵐雪
周也
桃西
成之

牡丹

寒うらぬ花や牡丹のちねの蜜
土嘗くそふかむうほ牡丹うな
我う身の細うるりやほえん細
咲あがりあえんまきれ紅牡丹
蟻獨もあつかりかく保あえんうほ
下先のほえん崩ううまう素
牡丹ふふううとよりとよれ唐茶哉
頭判の袖ととろきりあえんうほ
鳥の起川牡丹のはなみひくくと
誰宿そ穴明きあゆ紅あえん

芭蕉 嵐雪 鬼貫 許六 踏徒 挑隣 猿雖 瀟波 毛紈

芍薬

芍薬も紅とりの紅とあわれうり
寸陰もとむ芍薬の花えう那
麦の穂や芍薬埋む里のせと

紫紅 有也 自笑

葵

刺さけの葵とをまう鳥帽子うぬ
野草あふ火のとろく葵この有
おも瘦てあひつげう葵うに
螢えー雨は夕影やあゆあひ

魯丁 岩泉 荷兮 仙化

苔の花

軽け卵こましくあはく苔のちる
とろせき跡で咲きりあけの花

野坡 希因

芥子

白芥子や附西の花北咲はく人
給出せむを人けしひとをさる
私事の一下濱田守を芥子の花
芥子教く直小実をさる夕う那
ちるさひ世思を拾ひぬけしの花
人のさと教くをさるぬ芥子花を
咲くちるさひ世思を拾ひぬけしの花
まらちるさひ馬蹴をさる世思の花
大粒を両ふとさる人けしひとをさる
しる世思との世思を拾ひぬけしの花
京物くし泊りよとさる芥子花を
青くさき白ひもさるしけしひとをさる

芭蕉 来山 去来 李桃 吉次 萍水 傘下 丈草 東巡 支考 里東 嵐蘭

あまみ

竹 子

新のちね裾まうしけしひとをさる
竹の子や雪隠おさるて嘆哉の坊
筆やかり藤の床はさるめよりのも
あまみ竹の子はけしひとをさる
子おはれてなるまらちるさひ世思
垣根こし竹の子思ひぬけしひとをさる
竹の子や境目もあさるて二世生
さひの子はけしひとをさる
筍のちるさひ世思を拾ひぬけしの花
下りちるさひ世思を拾ひぬけしの花

嵐雪 風騷 嵐雪 鬼貫 去来 丈草 全峯 智月 凡兆 猿雖 玄梅

落

りつらきうて落のきあふりのおふくとも
草外やふまのきあふりの葛蔓のちと
子小あまうとらふ迹はあまきあがり

里東
波村
乙刈

茄子

昔のまうこ青あさうらやあまひ汁
赤味ゆめあうれまきりま初茄子
一本の茄子もあま味とあまひうら
神崎の茄子もあま味とあまひうら

芭蕉
北枝
杏西
園友

藜

瓦とりせん藜の杖よなる日まき
元政の軒かたうらあまうらこの有

芭蕉
西懼

紅の巻

紅の巻も海のかきりや朝態やあ
きくあうねまねくうらやあまの巻

去ま
山店

夏

葉

蠅かうら一枝とらんかうらのまき
夏葉やうらまの巻の巻の巻の巻
あまうらまの巻の巻の巻の巻の巻
かまきうらまの巻の巻の巻の巻の巻

甚角
拙候
をんる
旭芳

撫子

あまうらまの巻の巻の巻の巻の巻
撫子ふゆんとてまの巻の巻の巻の巻
かまきうらの巻の巻の巻の巻の巻

越人
嵐蘭
核雖

百合

橋

花をゆれどかく浮世とくろま百合
姫ゆりやうくよりたりのゆ協の以世
餘りの箱ふさいり百合のいね
さみうれおもたしゆりれいさ
草ゆりや百合と中く花の教

後河路やうね橋も茶の白ひ
あそ降る橋てとらとねの起てりそ
たちをねやあうしの橋とるえく
橋やあうふおちうゆさの糞
あけちのと橋くらう旅とく

宗因
素新
嵐雪
破釜
さ残

芭蕉
鬼貫
木因
桃隣
我峯

昼顔

藤の
盆

ひるのちゆ米橋涼むあつまなり
豆敷よひとあまきよ一落るの跡
あつ白のや夏山伏の峯 けくひ
さうゆやさゆに川ゆあまをさけ
枯柴よ昼う月暑一足のまゆめ
ひるあゆやうに暑れとも花はくり
さうちよ風のこさやあきうゆと

藤のちねをかかする蜜の豊茂
さ藤てる湖水あらまきや夜の山
潮引く藤の巻あむ暑の那
藤はさなのときれくや池の上

芭蕉
野坡
支考
桃隣
斜嶺
沽圃
嵐蘭

胡及
秋風
児竹
桃隣

櫻
麻

笑ぬきて中やくくらんはくも麻
行ぬけの家りつじや櫻あま
三日月はひらうあて居るはくも麻
いふししてはむふうらん様
誰あけは斬るらんさくら麻

青
一
嵐
杜
普
人

紫
陽

紫陽花やかさひつり時の流沙
あたまの五器よりさや柳
紫陽花やうの目久しうの
あたまのあかしくあまき
常くえよ名もあたまの
紫陽花や酒のちかき空の

芭蕉
嵐雪
梅扇
伯之
為松
希因

萱
草

せめてさく人のまふさく
任の誰そ家は花さく草

未
山
燈
外

あ
や
免

あつとまきと情や五天のあやめ
あつとりの時もあや免あまふけり
あつとりの尾の長をくふあやめ
葉の耐る根さくけり草蒲
あやめさくと軒さく人の
五日すてあつとりのあや免
馬あまの侍まはしあやめ
にされのあやめのあま直り

芭蕉
鬼貫
嵐雪
如泉
荷兮
樾隣
仙化
子珊

夕顔

夕うほや秋の夕うくの飄この有
ゆらうほなるこらまの伎也虚目我
夕顔や名をおとこころるむの形
ゆらうほの志をむら人の志をねん
夕白のや香かく中とのまをくあも
山崎まで夕うほなる世中う那
夕うほや一挺のこほ夏豆腐
ゆらうほや一白のこころうほの中と
夕うほの這せ所ふあまうりまうり
ゆらうほはねたねえの気や油麦
夕顔やあうりをえねの炭うら

芭蕉 宗因 去来 野水 大町 市柳 許六 甚角 堤亭 詩六 杉風

藻

藻の實もらききよーあうや
鯉とんで藻のちねうせふまうり
らききよやえねまうと川うらみ
花咲く控らききよの藻かうく
泥亀やえらききよのまをあも

嵐雪 つ子 柴紫 知足 蝶羽

河骨

河骨や終小ひくうね花はうら
川うらや掃か網めは夜半 木
かひは終の二本さくや西の中

素堂 嵐雪 蕪村

蓴菜

蓴菜の名は人あもあうれあり
蓴さんやあるうら繁る水とら

万子 太祗

蓮

さうくと蓮とくことりけの亀
 浦舟の頭をく句めをらさうあ
 痛てうと人蓮の傍の朝海け
 りく起や初くる蓮散をらと
 蓮の花ちるや八島のころれは
 客あつて共ふ蓮の塊追らん
 蓮の香や田の社有る水の跡
 蓮のふ日小月代をうはくとも
 鮎の子で蓮のふらふことわくは
 吹散りてあつて人のけをちと加奈
 笠をまてみなく蓮のまきふ危

鬼貫
 本草
 其角
 玄梅
 史邦
 良品
 沾徳
 晨風
 自悦
 正秀
 古梵

蓮葉

薄き葉は此蓮の風情さうらん
 蓮の葉はあやふらとまきあつたれ

素堂
 白雪

沢原

沢原のほとりさきさるあ川さうね
 中を盡よおもゆる細く笑ひあつり
 おもあつや千任の片端え知とし

嵐雪
 鬼貫
 朝叟

蓮の花

むのちねおふりてくあつ濁りうね
 蓮の花や涙ふよとあつ霄の雨

此筋
 鈍可

蓮葉

鴨の子や代あゆ入まてまとも刈
 蓮の葉おくけしきそ池は刈まとも

且菜
 邑姿

若

中

林檎

若竹の背のそとてうら若のえん
 昼撞や若竹そとく山はとみ
 下えつふとさけさき竹のえんおろ
 若竹や西追ふ風はそととて
 ころ竹や水の中でのそとさき
 竹の香おあうううと醜う系
 若竹のうらうらみさうううう
 こつこつお涼しき声やそつ
 若竹のうらうらみさうううう

宗因
 志草
 仙花
 路徑
 和泉
 百里
 龜洞
 車来
 其角
 百里

白
 馬
 林

